談話室

食・農・環境，グローバル・対・ローカルの対抗

――カリフォルニア・エコファーム会議から――

カリフォルニア大学のバークレー校に約１年半ほど各員研究の機会を得て，この 春帰国した。ちょうど時期的に，大統領選挙の騒動，規制緩和が裏目に出たカリフォルニア電力危機（停電騒ぎと料金高騰），米国史上最大のエンロン経営破綻，同時多発テロ事件とブッシュ政権のアフガニスタン攻撃など，大事件が重なった。まさに激動のアメリカの様々な面を見るいい機会となった。ここでは，とくに食・農・環境にからんだ動きについてレポートしたい。

紺碧の海と白砂の海岸線に囲まれたアメリカ西海岸のモントレー湾の半島に，州立公園と関連施設「アシロマ会議場」がある。最初に遺伝子組み替え技術の実験ガイドライン・規制について話し合った「アシロマ会議」（1975年）をはじめ，さまざまな国際会議が開かれてきた場所だ。当地で，恒例の第22回エコファーム会議が，2002年２月23～26日にかけて開かれ，有機農業農家，流通・小売り・食品生協・レストラン・行政の関係者，研究者，地域活動家など約1300人が集まった。

今年は，GMO（遺伝子組み替え食品）問題や自然（原生植生）復元を組み込んだ農業（ワイルドファーム）などの新課題も組み込まれ，広範なテーマと分科会が数多く企画された。なかでもとくに注目されたのは，全体会での有機農業農家の全く対照的な発表であった。一方は，小規模家族農業，自給型多品目複合経営で20年近く約200人の消費者と結びついてコミュニティ支援農業（CSA，日本の共同購入・産直提携と似た形態で学校教育等との連携も強い）を続けてきた事例で，私たちにもなじみ深いタイプである（当地にはちょうど我が子の学校の農業合宿で訪問する機会があった）。

他方は，1984年当初１haほどの小規模経営から始まって，およそ100種類の有機野菜のサラダミックス（パック詰め，ブランド名「ナチュラル・セレクション」）を開発・販売して大成功をおさめ，流通・加工部門の企業と提携合併して，現在はカリフォルニア州外やメキシコにも農場を広げ，総計数千haの農地と700人余りの雇用労働を抱えるベンチャービジネスの事例である。

有機農場での農業体験合宿の様子

日本と同様，アメリカでも有機農業ブームが広がっており，近年，年率20%もの販売拡大が続いている。健康・自然志向を背景にいわゆる差別化商品としての地位を確立し，事業が急拡大してきた。しかし，有機食品市場

ベンチャー有機農場（サラダミックス販売）の見学風景

の拡大で起きたことは，通常の農産物・食品市場で起きている状況の引き写しである。当初は，小規模農家のニッチ（すき間）市場の側面が強かったものが，ここにきて市場のメインストリームに躍り出た。

その結果，すでにカリフォルニアでは，オーガニック市場の半分近くを５大農場が 占めてしまうほど寡占化が進んでいる。スーパーマーケットをはじめ，大手量販店 が参入するなかで，低価格化が進み生産価格割れの価格暴落が有機市場でも起き出した。せっかく手塩にかけて育てた有機農産物を，一般市場にたたき売りするような事態さえ起きているのである。さらに，中南米をはじめ最近は中国などからも輸入有機産品が増え，低価格化に拍車がかかっている。

エコファーム会議での大きなトピックは，グローバリゼーションの問題であった。地域の食料・農業・環境の安全保障を破壊してきた従来の農業・食料システムに対抗して成立した有機農業運動が，今や大きな曲がり角に立っている。この問題について，多くの場面で議論が沸騰した。関連テーマのパネリストの一人，マーク・リッチー氏（食糧農業政策研究所長）は，強者のための自由貿易・市場主義を批判し， 地域レベルの食料安全保障政策の強化とともにWTO（世界貿易機関）体制と国家政策に対抗するNGOパワーの重要性を訴えた。各分科会でも，地域を基盤にしたファーマーズ・マーケットやコミュニティ農園，支援農業（CSA）の取り組み，それらと連携した食農教育プログラムの学校・社会・消費者教育での実践事例などが数多く報告された。

弱小農家が急速に消滅し，家庭料理がファストフード産業に取って代わられたアメリカだからこそ，一種の社会的対抗力としてファーマーズ・マーケットやコミュニ ティ支援農業（CSA），食農教育の見直しなどが活発に展開されているのだと思われる。巨大スーパーマーケットのチェーン展開，大規模企業型農業の隆盛，遠距離流通化が進行するなかで，工業製品化し「エサ」化していく食と農の現実に対する批判と抵抗，再構築への模索がそこにあった。我が国にもまして農業や社会をとりまく状況が厳しいアメリカであるがゆえに，こうした動きが積極的かつ創造的な展開をしているかにみえる。グローバリゼーションの震源地での人々の抵抗と再生を目指す動き，マスメディアではかき消されてしまうオールタナティブの動きに注目したい。

（注）1．エコファーム会議のウェッブサイト： http://www.eco-farm.org/eco.html
2．ゼミのサイトに「カリフォルニア便り」掲載中：
http://www2.kokugakuin.ac.jp/~furu1/main.htm
3．本稿の関連内容が，山下惣一編『安ければそれでいいのか？！』コモンズ，第５章に詳しく掲載されているので，併読いただければ幸いである。

（国学院大学経済学部教授　古沢広祐・ふるさわこうゆう**）**